

2020年2月28日

ゲント大学ジョナサン・レギエ博士招聘報告

明治大学文学部
坂本邦暢

2019年10月26日から11月9日まで、明治大学研究者交流制度を利用して、ゲント大学科学史研究所ポスドク研究員のジョナサン・レギエ博士を日本に招聘した。レギエ博士は、現在最も生産的な若手科学史研究者の一人である。ヨハネス・ケプラーについての博士論文で学位を取得した後、ケプラーにとどまらず、初期近代の医学者たちについて数多くの論文を公刊している。また、欧州科学史学会が発行している雑誌 *Centaurus* の編集委員もつとめている。

招聘期間中、レギエ博士は招聘者（坂本）と研究上の情報交換や今後の共同研究の打ち合わせをした他、下記の研究会に参加・発表した。

「初期近代の科学と神学 カルダーノ、ベーコン、ライプニッツ」
Early Modern Science in Theological Contexts: Cardano, Bacon, and Leibniz

日時：2019年11月2日土曜日

場所：明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント17階C6会議室

プログラム

15:00-16:00

Jonathan Regier, “Reading Cardano with the Roman Inquisition: Astrology, Celestial Physics and the Force of Heresy”（「ローマの異端審問所とともにカルダーノを読む：占星術、天の自然学、そして異端の力」）

16:20-17:00

Hazuki Shimono, “Theology and Religion in Francis Bacon”（下野葉月「フランシス・ベーコンにおける神学と宗教」）

17:20-18:00

Junki Miura, “Leibniz’s Metaphysics and Organism” (三浦隼暉「ライプニッツの形而上学と有機体」)

研究会は10名程度の参加者を迎え、活発な意見交換の場となった。レギエ博士の最新の研究である、ルネサンスの医学者ジローラモ・カルダーノにたいする異端審問の分析についての発表では、宗教改革を受けての異端審問官の関心の所在が明らかにされた。その後、フランシス・ベーコンについての下野氏の発表に関しては、レギエ博士からカルダーノの学問観とベーコンの学問観を対比する視点が出された。近代科学の文脈に収められることの多いベーコンを、ルネサンスの自然学の脈絡で捉える必要性が認識された。最後にライプニッツについての三浦氏の発表をめぐっては、ライプニッツの哲学の解釈をめぐる実在論的解釈と観念論的解釈が議論の主題となり、通常の実在論とはかなり意味を異にするライプニッツ研究史上の実在論の意味合いについて、参加者のあいだでの理解が深められた。

全体として、最前線で活躍する研究者の最新の研究成果に参加者が触れることができたとともに、若手の研究者にたいして英語で発表、議論をする機会を提供できたことには、大いに意義があったと考えている。このような実り多い招聘を可能にしてくれた本学研究者交流支援制度と、国際連携本部のスタッフに御礼申し上げたい。

なお研究会でのレギエ博士の発表は、原稿読み上げの方式で行われた。その原稿は、現在下記の論文として公刊されている。

Jonathan Regier, “Reading Cardano with the Roman Inquisition: Astrology, Celestial Physics, and the Force of Heresy,” *Isis* 110 (2019): 661–679.